M・アーノルドの「エマーソン」とアメリカ文明の拡大

渡　辺　栄太郎

M. Arnold's "Emerson" and the Enlargement of American Civilization

Eitaro Watanabe

1

マシュー・アーノルドが晩年、1883年と1886年の２回にわたりアメリカを訪問し、その印象と新興国アメリカ合衆国への期待を、２つのエッセイとして刊行していた。その記事の内容については、前論で充分検討されたものと考える。また当論の項目３では南北戦争と戦後の再建に関連し、特に奴隷の問題とリンカーンのゲティスバーグ演説を焦点として取り上げ、アーノルドの論の背景ともなる文明論的な立場から、その論旨を繋ぐ意味で記述するものとなった。

所で1885年には彼の第１回訪米中の講演論集の３つが、"*Discourses in America*" として出版された。この書には "Numbers"、"Literature and Science"、"Emerson" が含まれている。そこで本論ではその１つ「エマーソン」を最初に取り挙げ、また改めてアメリカ文明の発展を、エマーソン論に幾らかでも関係づけながら、フロンティアの拡大と移民の流入を対象として跡付けをして行こうと思う。"Emerson" のテキストはミシガン大学アン・アーバー版、アーノルド散文全集第Ｘ巻 "*Philistinism in England and America*" を用い、この中編論説を荒削りながら一旦全訳して考察を加えるものである。ただし本論では「エマーソン」論の後に大きなテーマを２つ扱うので、アーノルドの原著論説は１つに限って論述を進めることにしたい。

先ず最初にこの『アメリカでの講演』に付された序文を紹介し、原稿枚数の節約から原文の一部を除いては大要を示すことによって、作者アーノルドのこの著作に寄せる思いを探ってみることにしよう。冒頭に原文の見出しを添えて、本来の感覚を留める事とする。

Preface

［to *Discourses in America*］

Of the three discourses in this volume, the second was originally given as the Rede Lecture at Cam-

bridge, was recast for delivery in America, and is reprinted here as so recast. The first discourse, that on "Numbers" was originally given in New York. It was afterwards published in the *Nineteenth Century*, and I have to thank Mr. Knowles for kindly permitting me to reprint it now. The third discourse, that on "Emerson," was originally given in Emerson's "own delightful town," Boston.(1)

「この一巻での３つの論説の中で、第２のものはもともとケンブリッジでリード・レクチャー（解釈講義 *cf.* Rede, 古語）として成されたものであって、アメリカでの講演のために書き直され、ここで書き代えられて再印刷された。最初の論説は「民数記」（旧訳）についてで、元来ニューヨークで施行されました。これは後に「ナインティーンズ・センチュリー」誌で刊行され、今再発行を許してくれたノウルズ氏に私は感謝しなければならない。第３の論は「エマーソン」というもので、エマーソン「自身の懐しい町」ボストンで講演されたものです。」

私（アーノルド）はアメリカの聴衆の皆さまが、お世辞も言わず、言っても巧くもなかった話し手に耳を傾けてくれ、そのまごう方ない注目とご親切には唯ただ感謝の他にありません。私がエマーソンについて語った乏しい賛辞、それは彼に対する普遍的で混り気のない言葉でしたが、それを充分評価して下さった。またアメリカの人びとへの尊敬とアメリカの制度の優れた適切さに感動し、母国（イギリス）に帰って後はその美点を強調する機会を有してきたのです。「民数記」の論説ではこの高度な尊敬に一致しないものがない事を示し、ただ道義的大義（moral causes）が合衆国の存立と没落を支配しているという警句があったのみです。

我れわれはこの国（イギリス）でも勿論この大義は必要不可欠であり、その偉大な真理に向けて進むよう強く促されています。その政治は「とびとカラスの闘い」（battles of the kites and the crows)、野蛮人と俗物の闘いで、国民的成長の本能の下でいずれか一方を是認するのではなく、それぞれが変革されるよう要求されています。我れわれの貴族階級、野蛮人たちは、母国の共同社会に見られる現実性への認識に対する感覚に不足し、中流階級、偉大な俗物勢力は、実質的決定力があるに拘らず対外世界への現実的対応の感覚を有しないし、その指導的糸口も持たない。イギリスを取り囲む困難を前にして、野蛮人たちにはその対処が不可能で、俗物たちに現在の経過を事実上決定させながら、やがて力を持つとも予想される大衆との調和を期待しているようにも見える。現在貴族院には危険が、下院にはスキャンダルがあり、全般的に不適切な状況が続いている。しかし一つの慰めが我れわれには残されている。それは英国人個人個人が古くからのエネルギーで、勇気と美徳を以て変わることなく、自分に課せられた義務を果たしているという事だ。その力を獲得したのは、

～ ; by having believed, more steadfastly and fervently than most, this great law that moral causes govern the standing and the falling of men and nations.(2)

「～、大抵の者より強固に熱心に、道徳的大義が人と国家の存立と没落を支配するという、この偉大な法則を信じてきたことによる」とする。

我れわれに変革がなければ最終的に立つことが出来ず、またより以上の光なしには我れわれが

変わることはできない。試練を乗り越えて、自分たちの健全な思想を人生の法則の上に安住させること、これこそが我れわれを見事に、且つ立派に慰める基となることであろう、とアーノルドは警告的趣旨を述べている。

※　※

アーノルド若年時代の友人で彼の書簡集の編集者を務めたG. W. E. Russellは、アーノルドの死の前年、アーノルド自身が"*Discourses in America*"は、自分の全散文作品の中で最も記憶されたい本だと言っていた事実を書き留めていた。(3) それに収められた３つのエッセイは事実上、社会、教育、文学上の彼の書き物の中の典型・縮図であり、特に"Literature and Science"と"Emerson"の２つは、文体・思想の成熟とその力量を示す最善の作品となったというのである。

アーノルドの講演旅行は仲なか厳しく辛いもので、約４か月の間に65回の演説が実施された。開演の場所についてはニューヨークはじめアメリカの各地、カナダにまで及ぶ広範囲なものであった。この事については拙著『マシュー・アーノルドと諸人の救い』の第一編に述べた通りである。(4) また彼にとってその動機となったことは、自らのアメリカ旅行の費用にあてるのと、息子のオックスフォードでのギャンブルの損失、オーストラリアへの旅立ちへの支援金などを含め、彼の出版社のGeorge Smithへの約1,000ポンドの支払いに供するものであった。実際には彼の旅行はD'Oyly Carteのマネッジメントの傘下にあって、かなり割高な支払いであったらしい。しかしアーノルドはこのアメリカ滞在で、国家とその人民について貴重な教訓的体験を重ね、次回の訪米に3,400ポンド程も稼げると楽観して、1885年の９月末には86年秋に再度のアメリカ公演旅行の計画を立てていた。彼の講演の反響はボストンの'*Sunday Herald*'での力強いとする批評のほか様ざまであったが、後"*Arnold in America*"、"*Matthew Arnold and American Culture*"など、その他にも幾つかの単行本を産み出す契機となっている。1885年４月の９日までに、このアーノルドの論説は"*Discourses in America*"のタイトルとして確定し、以上３つの作品に限定されて、1,250コピーがロンドンとニューヨークで上梓された。アーノルドはこれで、新たに£75を支払われたとされている。

2
"Emerson"

1882年４月27日にエマーソンが死去し、アーノルドは彼について論説を書くことを思い立って、これをマクミラン社に提案した。1867年の夏、アーノルドはマクミランを通じて自己紹介の手紙を彼に送っていたのである。それから７月の半ばにアメリカ旅行が形をなしてくると、そのエッセイは延期され、後アメリカで講演するように計画された。彼がアメリカに出発した日の夕方、姉フォースター夫人（ジェーン）に、「まだ１行も書いていないが、ニューヨークを抜け

出してエマーソンが埋葬されているConcordとボストン湾を見に行き、当地の印象をもって講義を書きたい」[5]と伝えていた。また妹（Fransis）と年下の娘にも手紙を書き、船上でエマーソンの書と彼のカーライルとの文通を読んで、講義の構想がまとまってきたと知らせている。アーノルドは11月５日にボストンに到着、２日後に“Numbers”で最初の公演をした。“Emerson”の下書きは初めボストンの印刷所に送られたが、ハーバード大学出版部が改めて印刷の面倒を引き受ける約束をし、彼は11月21日、プリンストンとニューヨーク間の列車内で校正をしていたという。現在その両校正写本がハーバード大学に残されている。12月１日ボストンのChickering Hallで最初に公演され、アメリカ滞在中にこの“Emerson”は合計18回実施された。その後イギリスで‘*Macmillan's Magazine*’５月号に掲載されている。

※　※

Forty years ago, when I was an undergraduate at Oxford, voices were in the air there which haunt my memory still. Happy the man who in that susceptible season of youth hears such voices！ They are a possession to him for ever. No such voices as those which we heard in our youth at Oxford are sounding there now.[6]

「40年まえ、私がオックスフォードで学生だった時、私の記憶に尚焼き付いている声が大気の中に響いていた。あの多感な若者の季節に聞く者は幸いである！その声は彼にとって永遠の持物となる。オックスフォードで我れらの若年時代に聞いたような声が今此処に響くことはない。」

「エマーソン」の書き出しは、この高調した文章で始まる。‘Happy the man who—’とは、聖書の言葉使いを思わせている。その声とは、当時オックスフォードで毎日曜日、St. Maryの壇上で説教し、イギリス国教の刷新を訴えていたNewman（枢機）卿であった。教会内の幽かな午後、宗教的音楽のように響く甘美な言葉と精妙な思想に共鳴し、アーノルドは感激に浸っていたのである。それはオックスフォードが投げかけていた中世最後のこうこつの影であった。しかしこの他に響いてくるもう一つの声があった。それは感傷的雄弁の中にも力強い緊張感をただよわせたCarlyleの声である。特に若い年代の者たちの耳に強く届いたのが彼のゲーテの話であった。アーノルドはカーライルの翻訳で以て“*Wilhelm Meister*”に親しんだ。生きて蓄えられた過去の美しいイメージは大理石となって心の中に生きている。聖なる熱意（Holy earnestness）のみが人生を永遠の珠玉とするからである、という偉大なGoetheの言葉に感動していた。マイスターに見る人間生活の大きさと自由な考え、それは当時の英国人にとって何と斬新で教育的であったことか！、と。

And besides those voices, there came to us in that old Oxford time a voice, also, from this side of the Atlantic, —— a clear and pure voice, which for my ear, at any rate, brought a strain as new, and moving, and unforgettable, as the strain of Newman, or Carlyle, or Goethe. Mr. Lowell has well described the apparition of Emerson to your young generation here, —[7]

「それにこうした声の他に、あの古いオックスフォード時代に、また大西洋のこちら側から、

一つの声が聞こえてきていた、――澄んだ純粋な声で、ともかく私の耳に、ニューマンやカーライル、ゲーテの調べのように、新しく、心動かし、忘れ難い旋律をもたらした。ローウェル氏がエマーソンの面影をここの皆さんの若い世代に向けて立派に叙述したのである、―」

エマーソンはアメリカ人の魂の人、肉体を持った天才であって、あなた方に直接話しかけ、最も影響力があり、他に誰も彼に匹敵する人は居ない。アーノルドの若い時代にオックスフォードへも、3,000マイル離れたボストン湾とコンコードからエマーソンは話しかけ、ニューマンやゲーテが与えてくれたと同じ大きな感動を、アーノルドたちに呼び起こしたというのである。

"Trust thyself! every heart vibrates to that iron string. Accept the place the divine providence has found for you, the society of your contemporaries, the connexion of events. Great men have always done so, ―"

"And we are now men, and must accept in the highest spirit the same transcendent destiny; and not pinched in a corner, not cowards fleeing before a revolution, but redeemers and benefactors, pious aspirants to be noble clay plastic under the Almighty effort, let us advance and advance on Chaos and the dark!"(8)

『汝自身(みずから)を信じよ! あらゆる心があの鉄の絃に共振するのだ。聖なる神意があなた方に見つけてくれた場所を受けいれよ、あなた方の同時代人の社会を、出来事の関連を。偉人たちは常にそうしてきたのだ、―』

『所で我れらは今人間なのだ。最高の精神で同じ卓越した（超絶的）運命を受け入れなくてはならぬ。隅で縮みあがる事なく、革命を前にして逃避する憶病者とならず、救済者、後援者或いは敬虔な熱望家として、全能の神の下で高貴で温順な粘土となって、混沌と暗黒の上に前進し続けよう！』

エマーソンのこうした文章、それに同じ調子の百もの言葉を、私は自分の記憶から消し去ることはなかった。そうして遂に、私はエマーソン自身の国にやって来た。そして今ボストン湾を見遥かしている。私の若さに溢れた賞賛の対象について、実際には何が真実か、これを確かめてみよう。不適切な要素がしばしば人間の評価に入り混じるからである、という自分の気持ちを述べてエマーソン論を具体的に展開して行く。

全文を粗く翻訳してみて、私たち外国人には、この中編エッセイ「エマーソン」はアメリカで催行された各公演一回で、全部完結し得たものだろうかという思いがする。勿論アメリカ人聴衆とはいっても、それなりの有識者層でないと内容の把握はおろか、演説の長さに飽いてしまう人もあったことであろう。さて、此処ではともかく、「エマーソン」の論旨を筆者の能力内で解釈・解明し、幾つかの項目に分けてその紹介と批評検討を試みてみよう。その上で最後に、エマーソンのアメリカ思想・文学に於ける位置づけと彼自身の全体像などを、簡潔に思い描いてみることにしたい。

ラルフ・W・エマーソン
（「現代のアメリカ」，大修館書店版より転写）

（1）或アメリカの批評家の覚え書きに、エマーソンの詩節がイギリスでの話し言葉の中に入り込んでいる、という記事をアーノルドは見たという。イギリスで一般に、それ程知られ、馴染みの普遍的引用となったと公平に言える決まり文句（the kind of phrase）、とは何だろうか。シェークスピアの‘Patience on a moment’、ミルトンの‘Darkness visible’、グレイの‘where ignorance is bliss’などに匹敵し、アメリカだけでなく、それは英語詩の沢山の愛好者に行き届いた拡がりを持たなければならない。これでアーノルドは、英米詩の愛好者に現在耐え得るものとは思えないと判断する。

His poetry is interesting, it makes one think; but it is not the poetry of one of the born poets. I say it of him with reluctance, although I am sure that he would have said it of himself; ―[9]

「彼の詩は面白い、それは人を考えさせる。でも生来の詩人の一人としての詩歌ではありません。私は不承ぶしょうでも彼についてそう申し上げる。けれども彼自身そう言ってきたと信じています。―」

こう言うのは彼の信奉者たちに失望を与えたくないからであり、本当の所は、エマーソンの中にある不死のもの（that in him which is immortal）を際立たせ、確保しようとするからであるとする。ミルトンは詩歌は単純で審美的、感動的であるべきだ（poetry ought to be simple, sensuous, impassioned）と言っているが、エマーソンにはそれが欠け、その上具体的直接性がない。主語と目的語の間に明確な区別がなくてあいまいさを残す。Concord Monument[10]に刻まれた‘Fourth of July Ode’「7月4日頌」、‘Boston Hymn’「ボストン賛美歌」のような高尚な詩行は例外で珍らしい。

So nigh is grandeur to our dust,
So near is God to man,

When Duty whispers low, Thou must,
The youth replies, I can. (11)
「如何な栄華も塵に似て、
神もかく人に近し。
成すべき事の汝かくあれと囁けば、
若者は答う、可なりと。」

アーノルドはこれを‘Excellent!’と一言批評している。簡略のため一つ省いて次を引用しよう。

And ever, when the happy child
In May beholds the blooming wild,
And hears in heaven the bluebird sing,
"Onward", he cries, "your baskets bring!
In the next field is air more mild.
And o'er yon hazy crest is Eden's balmiers spring." (12)
「これまでも、五月、幸いの子
花咲く荒野を眼にする時に、
また天上に青い鳥さえずるを聞き、
子は叫ぶ、「前へ、そなたの籠を持ち来れ！
次なる荒野の大気はやさし、彼方に
霞む頂き越えて、香わしきエデンの泉こそあれ。」」

アーノルドは、この1節の文体と抑揚にはGrayへの追憶があり、詩行の純粋さ、優雅と美は彼のものと一致すると言う。この作品"Mayday"は全体に平明さと具体性が乏しく、優れた観察があっても真実の展開（real evolution）に欠けるとみて、象徴主義（symbolism）に留まると考える。これはエマーソンの全詩について言えることで、物事の外貌のみを捕えて詩的価値を損なっている。具体性の美徳ではLongfellowの"The Bridge"、Whittierの"School Days"の方が詩的価値に富む。従ってエマーソンを大詩人の間には置かない。またCicero、Plato、Bacon、Pascal、Swift、Voltaireなどの偉大な文人、大作家の列に序するわけには行かないと裁定した。これらの文人には第一に、天才と文体への本能があり、その散文は生来の必然による真実性と健全さを持つという。エマーソンには高尚で感傷的雄弁を示す要素があって、鋭敏で巧みな機知の文章、歯切れよい警句、精妙な自然観察力に長所を見出せるが、上記の生来の条件を満たすものではないというのであろう。エマーソンが賞揚するカーライルも、これには相当しないと裁定している。

But they are great literary masters, they are supreme writers, because they know how to work into a literary composition their materials, and to subdue them to the purposes of literary effect.(13)

「しかし彼らは偉大な文学的達人であり、最高の作家である。彼らは自分たちの素材をどうして文学的構成に仕立て上げるか、またどうしてそれらを文学的効果の目的に統制するかを、知っているからである。」

言うまでもなく、ここでいう彼らとは、シェークスピア、モリエール、スウィフトたちの事である。これがアーノルドの考える第一級作家の持つ手法の基本要件なのである。

エマーソンの詩が普通一般の人口に膾炙されているというアメリカ人記者の記事に対する疑問から始まる。一言に敷えんすれば、彼の詩は生来の第一級の詩人の作品に並ぶものではなく、また彼は歴史的な西洋の最高の散文作家の地位に相当するものでもない、と言い切っていることである。その上でその根拠を提示している。その当否について、特に詩歌に関して言えば、それを判断するには英詩を深くて、しかも広い造詣を伴った素養を有しなければ軽がるしく論じられるものではない。それはアーノルドなりの理解からする判断として、我れわれは了解しなければならないであろう。またエマーソンの詩は、彼自身の思索・思想を叙述した日記 '*Journals*'（10冊、1909－14出版）の散文から詩に歌い込んだ部分的なものが多く、第一級の詩人の作品とはならないというアーノルドの評は理解できる。本節（1）に引用した2つの英詩の見本も、エマーソンの「人間は自然の一部であり、自然は神の意志の反映である。したがって人間は神性をうけているゆえ、なるべく自然に近い生活をして、内部に有する神性を発達させれば、完全の域に達しうる」[14] という Transcendentalism の主張が見事に表現されていると考えてよいであろう。

（2）プラトンは偉大な文学的人間であり、大哲学者である。アリストテレスやスピノーザ、カントは文学的人間とは呼べず、偉大な哲学者と呼ばれる。エマーソンには彼ら（アメリカ人）の文化的資質はなく、哲学の提議者なのである。しかしその哲学には進化発展する構成を欠いて、カーライルと批評し合っても、系統立ったものは何も残していない。エマーソン自身、自分の宝石細工師の文体への手に負えない傾向 'formidable tendency to the lapidary style' と語り、その体系に不足する欠点を充分承知していたと言う。彼の詩は抽象的過ぎ、哲学も余りに漠然としているという批判もあるが、その最善の作は "*English Traits*" だとされる。疑問もなく楽しい読み物だが、最高の標準（the highest standards）で試験するとモンテーニュ、ラブリエール、アディスンとの比較には耐えない。エマーソンの観察はこれらマスターの公平無私な性質を持たず、組織的に好意的な人の観察で Hawthorn の "*Our Old Home*" と共通点がある。ただホーソンの作はくやしみの歪みにより、"*English Traits*" は楽観主義によって完全な作品になりきらない。従ってミルトンやグレイ、プラトン、スピノーザ、ボルテール、モンテーニュ、アディスンと同列には置けないと言う。ただし、

Emerson's systematic benevolence comes from what he himself calls somewhere his "persistent optimism"; and his persistent optimism is the root of his greatness and the source of his charm.[15]

「エマーソンの組織的善意は彼自身がどこかで彼の『永続的楽観主義』と呼ぶものから来ている。そしてその永続的楽観主義は彼の偉大さと魅力の源泉の根幹となっている。」

エマーソンはカーライルが賛える言葉に答えて、感謝しながらも、自分は詩人に属さず文学の低い分野での報道者だと述べている。アーノルドは弱よわしく孤独で悲しい "*Obermann*" の作者 Senancour を想起させると語る。しかしエマーソンは偉大な哲学者とは言えないが、彼と我れらの関係は、古代ローマ帝国の皇帝 Marcus Aurelius によく似ているという。アウレリウスは精神の中で生きる人の友であり、救援者である。彼は自分の思想を組織化したり、規則的哲学として提示してはいない。

They do very well as they now stand; —— like "boulders", as he says; —— in "paragraphs incompressible, each sentence an infinitely repellent particle." (16)

「それら（主眼点）は今在る通りよくできている、——彼が言う通り「玉石」のように。——「圧縮できない段落」で「それぞれの文章が無限にはじく粒子となって。」」

このような文章が繰り返し再発し、人の記憶に固定化して行く。そうして人生を取り巻くあらゆるものが人格に帰納して行く（First and foremost, character. Character is everything）。

我れわれは not ourselves（非我、アーノルドの神への呼称）の中に存在し、必要とされる善は永久に我れらに近く、人生はより高い水準の上で生きられねばならない。そのため男でも女でも他人を立派に扱かおう、そして幅広い正義を成すべきだ。他者との意見の相違や人格の格差が、器質性のものとは信じない。悪意ある人、無神論者、頑迷な保守主義者の階層の存在を信じない。排他性は致命的である。「社会生活での排他性は、彼が楽しみに充当する企みで自分自身をその楽しみから排除することを見ていない。宗教での排他主義者は他者をしめ出す努力をして、自分に天国の戸口を閉ざしていることを見てとらない。—— もしあなたが彼らの心を無視すれば、あなた自身のものを失うであろう」。「利己的な者は自分の利己性から、利益を奪われた相手より多く苦しむことになる ——」。'Compensation, finally, is the great law of life; it is everywhere, it is sure, and there is no escape from it.'（補償は最終的に、人生の偉大な法則である。それは何処にもあり、確実であって、それから逃れる道はない）。そして美しい法則であると見る。泥棒も欺く者も、やがては負債を払わなければならない。これらは特に人を勇気付けるものだ。'Trust thyself'（汝自身を信じよ）。エマーソンはニューイングランドの生活で、人びとが経験された未熟さや失敗より達成されたものが数多いと認め、尚一そう変革すべき事を学ばなければならないと説いている。

一口に言って、先ず気づく思いは、エマーソンの哲学は楽観主義の哲学だということであろう。人間精神の窮極を人格に見ているのは、善を至高点とする多くの哲学や宗教と同一であるが、善に向かうもの以外は信ずることはないとする確信が、彼の哲学の本質を根底的に裏付けている事実が読める。アーノルドがエマーソンを偉大な文学者と呼ばず、偉大な哲学者だとも語っ

ていない。彼を哲学者として見た場合、その哲学に組織・体系の構成がない事を強く指摘している。しかしアーノルドがエマーソンの思想的立場をローマ帝国末期の皇帝、マルクス・アウレリウスに凝して、そこに共通点を見ているのは将に当を得た判断だと考えることは出来る。アウレリウスは、プラトンが哲学者の手に政治をゆだねることを以て理想としたというその理想を、世界史上に実現した唯一の実例だと言われている。彼の手記『自省録』は古来、数知れぬ人びとを鞭打ち励ましてきたと言われている。「人生の時は一瞬にすぎず、人の実質(ウシア)は流れ行き、――一言にしていえば、肉体に関するすべては流れであり、霊魂に関するすべては夢であり、煙である」。「善事をなして悪くいわれるのは王者らしいことだ」。[17] こういう箴言からはエマーソンの言葉にも共通する思いを抱くことが出来よう。弟子が編さんしたものとはいえ『論語』なども、同じ形式と類似した内容を擁する東洋の一大古典である。それにTranscendentalismの背景には、プラトンや新プラトン派、ベーメ（17世紀ドイツの神秘思想家）、スェーデンボリ（18世紀スェーデンの自然科学者・神智学者）のほか、古代インドのヴェーダ聖典、ドイツ観念論、ゲーテ、コールリッジの理性と悟性の観念などがあるとされている。だがエマーソンが幼少の時に父を失い、６人の兄弟妹と共に賢明な母と学識豊かな叔母に手厚く育てられた所に、彼の性善説的楽観主義を抱く素地が培われていたのかもしれない。なお“*English Traits*”はエマーソン第２回めのイギリス旅行の印象を綴った1856年の作品である。

（３）エマーソンの思想の顕著な特性を、アーノルドは２つ取り上げてみせた。その第一は思想の要点が真実であり、実り多いという事実である。当節の社会に直面して、狭量で固定化した頑固な障害を突破し、新しい思考の入口を勝ち取った。第二に、エマーソンの楽観主義は良い結果への信頼と共に、征服し得ない確固たるものだったことであるとする。これが後代のアメリカ思想に大きな影響を持つことになる。

エマーソンは、ジョージ・ワシントンが既に長く幸せに亡くなっていると祝福を述べながら、アメリカの政治にみすぼらしさを見て、民主主義の下、政治家はその中にどんな希望があり、美徳があるかを自覚していないと嘆く。急進主義精神は嫌悪と利己主義から破壊的なだけで目的がない。保守党は穏健で教養ある部分で成り立つが犯罪に焼印を押さず、寛大な政策もとらず、憶病で財産防衛的なだけだ。正義を擁護し、真の善を希求しようとはしない。エマーソンは自分の博愛活動に、ニューイングランド人が結集するのを望んでいたであろう。

Yes, truly, his insight is admirable; his truth is precious. Yet the secret of his effect is not even in these; it is in his temper. It is in the hopeful, serene, beautiful temper wherewith these, in Emerson, are indissolubly joined; in which they work, and have their being.[18]

「さよう本当に、彼の洞察は賞賛すべきだ。彼の真理は貴重である。だが彼の効力の秘訣はそれらにさえあるのではない。それは彼の気質にある。希望に満ち、晴朗で、美しい気質の内にあって、これらを以てエマーソンの中で融解せずに結び合わされ、その中でそうしたものが働

き、その存在を有するのだ。」

エマーソンは自然についての無尽蔵の感覚は不死の若さだ（the perception of the inexhaustibleness of nature is an immortal youth）と知っていた。通常、人はこの自然から受ける感覚に希望を見出す事をしない。そこにエマーソンの存在の地盤があった、とアーノルドは述べる。これは丁度ワーズワースが韻文で成したと同じ重要さを、エマーソンは散文で達成したという事を意味し、そこに幸福と希望を見出したのである。そうして彼の指導的才分はエマーソン自身の持つ道徳的感覚、真実と正義を感得する感覚にあるとする。カーライルは労働、正義、誠実さの重要性を強調するが、幸福へのつむじ曲りの態度は人を希望から遠ざけてしまう。即ち幸福への欲望を断つ事が魂の安楽を得る秘訣だとする考え方であった。Epictetus も St. Augustine も厳しいモラリストではあったが、実は両人とも幸福への欲求は人間存在の根源的基盤だと認めている。現実には、人は幸福と希望を、しっかりと抱きかかえて生きることは欠く事ができない。

Happiness in labour, righteousness and veracity; in all the life of the spirit; happiness and eternal hope; ——that was Emerson's gospel.[19]

「労働に於ける幸福、正義と誠実。精神の全生活で。幸福と永遠の希望、——これこそエマーソンの福音であった。」

アメリカの現世代は彼が期待した程良くはなく、未来もそうかも知れない。しかし精神生活の中に幸福を位置付けようとする彼の信念は、やがて多数の人の共感を得て力を持つだろう。——この確信と希望によって、エマーソンは偉大であった。

アメリカには勇気と希望の確信を与えてくれる作家が２人居る。Franklin と Emerson である。希望とはワーズワースの詩の２行に歌われている。

The paramount duty which Heaven lays,
For its own honour, on man's suffering heart.[20]

「天の授くる至高なる義務、
それ自ら(みずか)の名誉にかけて、悩める人の心の上に。」

フランクリンの幸福に見出す自信、エマーソンはそれと同じ幸せ（felicity）を以て彼の精神生活を貫いた。彼を賞賛し尽くすということは有り得ない。アーノルドはボストン湾のほとり、或いはエマーソンの住み慣れたコンコードで、その銅像が一方の手を重荷を背負い苦悩するイギリスへ、他方の手は彼が愛し、成長する西方（アメリカ）を指し示している、と考えると述べた。偉大で知性あり、官能的で貪欲なアメリカに。

To us he shows for guidance his lucid freedom, his cheerfulness and hope; to you his dignity, delicacy, serenity, elevation.[21]

「我れらにとって彼はその透明な自由、彼の陽気さと希望への手引きを示し、あなた方には彼の威厳、優美さ、晴朗と高揚へと導いている。」

「エマーソン」論全体を通読して先ず感ずる事の第一は、マシュー・アーノルドという詩人・社会哲学者といわれる人が、将にこれは新興アメリカの文人・哲学者エマーソンを対象に展開した批評論エッセイだな、という思いである。自然と人間性の現実を肯定し受容した上で、幸福と希望という人生に不可欠な２つの願いを基礎として、その幸福の実現と正義の確立とをエマーソンが主張したと、アーノルドは評価しているように思われる。またエマーソンとフランクリンを２人の勇気と希望を与える作家として取り上げた動機は、ボストンの有名な文学世代で当時唯一の生存者であった Oliver W. Holmes 博士のエマーソンを賛える詩が、「エマーソン」論の講演以前に *Atlantic Monthly* 誌に発表されていたことに依ると、ニューヨーク大学出版の「ホームズの書目」に指摘されている。(22)

Where in the realm of thought, whose air is song,
Does he, the Buddha of the West, belong ?
He seems a wingéd Franklin, sweetly wise,
Born to unlock the secrets of the skies;
And which the nobler calling —— if 'tis fair
Terrestrial with celestial to compare ——
……
……
And steal their effluence for his lips and lyre ?

「思想の王国で、その大気は歌となり、
彼、西洋の仏陀は何処(いずこ)に属さん？
彼、羽生えたフランクリンに見まがい、優しく賢く、
天国の秘密の鍵を開かんと生まれ来(こ)ぬ。
またより気貴き者訪れて、——地上と天上とを
もし比べること公正であるならば——
……
……ひっそりと
思想の流れ、彼の唇と竪琴(たてごと)に昇さんがため？」

蛇足ではあるが「西洋の仏陀」とは、善の道を生涯に求めて歩いたゴータマ・ブッダにエマーソンをなぞらえたものである。

元来、「超越」(transcendence, Transzendenz（独）) という言葉は、日常の現実を越えて真の現実を探求しようとする人間の誰もが持つ経験に由来するものとされる。その意味ではどんな哲学も、超越を主要なテーマとしていると言える。現代にいう超越とはハイデッガーの哲学に負う所が多く、「超越」が人間主体性の根本構造であり、主体であること自体が超越しながら存在する

ことを意味する——即ち「世界に開かれ、認識や言語をもち、配慮しながら行動し、他人との間主観的な交わりを持ち得る」[23] ものであるという。

エマーソンの大きく関った「超越主義」(transcendentalism) は日本ではカントの超越論哲学と区別する必要からか、「超絶主義」と呼称されることが多いようであるが、1830年代から50年代にかけて、アメリカ、ニューイングランドのユニテリアン間の論争で展開された宗教、思想、文学全般にわたる運動であった。信仰の基盤をユニテリアン的合理主義にでなく各人の道徳感覚に置き、儀式と規範への盲従を排した直感に依る個人的判断を強調することで、後年のアメリカ思想に多大な影響を与えるものであった。その思想的背景は本節２の（２）で既述した通りである。しかしこのアメリカの超絶主義の特質は、哲学が単なる形而上学であってはならず、「人びとの実際の生活に密着して役立たなければならない」[24] という信念が実感として存在し、「ウォルデン」のディビッド・ソロー、牧師セオドア・パーカー、教育者ブロンソン・オルコットやG. シプリー、女権論者マーガレット・フラーらがボストン郊外のコンコードに集って活動した。アメリカ発展の思想的バックボーンを成したと言われ、20世紀を代表する哲学者ジョン・デューイの Pragmatism（実用主義）も当然その流れの中にある。しかしこの超絶主義の根底には、カントの超越論哲学（transcendental philosophy）に始まったドイツ観念論の影響を無視することは出来ない。

最後にエマーソンとアーノルドとの関りを示す数多くの記録から、唯一つだけ、次に掲げて置くことにしよう。

Arnold's Emerson lecture and the reaction to it were crucial, because they brought together two of his roles, that of the literary critic and that of the commentator on America, for the Boston reaction was as much a patriotic response as it was a literary one. ——[25]

これで見るとアーノルドの「エマーソン」公演の反響はけっこう厳しいものだったのであろう。特に地元ボストンでの反響はアメリカ人の愛国心の感情から、抵抗感も生じたようである。だがアーノルドの名声もあって、彼の見方も受け入れられ、やがて定着するようになったと記述されている。

"Trust thyself !" 我れわれが生きて何かの困難に出会った時、大きな自信を与え、自分を支えてくれる言葉となるだろう。しかしそのためには日頃、日常、自己(おのれ)の修養と日々の研さんをないがしろにして、安易に口に出していえる言葉ではあるまい。

3

本論の第１節で "*Discourses in America*" の Preface を、第２節では当書の３つの論説の１つである "Emerson" を検討した。次に続く第３、４節では、アメリカ文明の拡大する発展段階として、出来るならエマーソンの趣旨と関係を計りながら、フロンティアと移民の問題を中心に捕え

て考察して行きたいと思う。

※　※

（1）フロンティアの前進と消滅

今日「西部」といえばロッキー山脈の西と太平洋岸諸州を指すが、開拓が始まってからは、フロンティアが移動しながらなくなるまで、最初の植民地から西方の広大な地域を意味していた。開拓と定住が17世紀大西洋岸で開始されて植民地時代の末期にはアパラチア山脈に到達、18世紀末までにオハイオ河流域と、テキサス東部からメキシコ国境付近にまで進出した。プレーリー（prairie）地域以外は大部分が森林地帯であったので最初に毛皮商人が入り、森林を切り開いて農耕地にしたのは開拓者（pioneer）たちであった。定住者が増えて本格的に農業経営を行うようになると、必要な物資とサービスを提供する人びとが移住してきて小都市を形成した。今日の中西部では自営農民中心の農村地帯が発展し、中流階級的民主社会が成立した。一方南部では、奴隷を擁するプランターが綿花栽培などをして広い地域を占有していた。また合衆国の東半分には仏・西領があったが、自然とフロンティアの前進に呑み込まれていった。

古くは植民地時代、イギリスの領地では所有権は王室にあり、領主植民地であれば王から領主に与えられ、それが入植者や入植事業者らに免役地代を課して気前よく譲渡された。1785年に「公有地条例」が制定されたが、未売却未承認の土地を開拓して住んだ者（squatter）には1841年、合衆国議会が優先買物権を認めた。これが西部の発展を無秩序なものにして、現住民との紛争を一そう増大したのである。その上連邦の公有地政策は農民に与えたものは少なく、実際には土地投機業者、企業家、鉄道会社に売却された土地が大部分であった。「今まで人類の歴史の中で、これ程十分の資本と機械とに準備された農工業が、これほど豊富な開発の機会にめぐまれたことはなかった」[26] のである。

1849年になるとカリフォルニアで金鉱を発見、50年代にはフロンティアは急速に拡大した。森林地帯の西に丈高の草のプレイリー、その西にロッキー山脈まで短い草の大平原（great plains）が存在し、放牧業者が牛の王国を形成した。カウボーイが集まり、けんかも多くてピストルの撃ち合いもしばしばであった。カンザス、ネブラスカ、コロラドでは放牧業が盛んとなり、1859年にはコロラド、ネバダ西部で金銀を発見、ついでアイダホ、モンタナ、ワイオミングで、70年代にはサウスダコタでもゴールドラッシュが起きた。南北戦争後には大陸横断鉄道の建設が進み、1869年に完成した。70年代80年代にはサンタフェ、サザン・パシフィック、ノーザン・パシフィック、90年代グレート・ノーザン主要横断鉄道が開通した。特にアイルランド移民や中国人労働者が多用され、19世紀後半に開発されたアメリカ西半分では放牧業者、鉱山業者、鉄道建設者たちがフロンティア社会を形成していた。生活が荒っぽく、酒場が付き物で、けんか撃ち合いが絶えず、盗賊までが出没した。1890年に国勢調査局がフロンティア・ラインの消滅を発表し、19世紀の初め、ウィルソン大統領時に始まった未知の西部開発は、1世紀もたたない間に原住民ともども征服し、ここに終結を迎えたのである。

（2）先住インディアン諸部族の運命

先論「アーノルドの『グラント将軍』とアメリカ文明の形成」第４節で、チェロキー族インディアンについて、主として憲法と法律の面に特科して記述したことがあった。そこで本項では、アメリカ・インディアンの全般的流れを捕らえて、論述しておきたいと思う。

「フロンティアの前進は、一面では先住民族であるインディアン諸部族の生活領域が狭められ、彼らの生活が破壊されていく過程であった。」[27]　インディアン（西語 indio, *cf.* indigena インディヘナ、土着の）は、氷河期の１、２万年前に現在のベーリング海峡を通って新大陸に来た古代人の子孫であって、体形・言語・生活様式の違いから多数の部族に分かれていた。植民の初期には入植者の武器に依るよりも、免疫を持たない事で、持ち込まれた病原菌が先住民族に災厄をもたらしていた。大西洋岸にイギリス、セントローレンス（サンローラン、仏）河流域と五大湖地方をフランス、ミシシッピ河流域南西部をスペインが植民地としていたので、インディアンたちはそれぞれ異った白人と接触していたのである。このうち最もしばしば紛争を引き起こしていたのはイギリス植民地であった。最初の入植者が来た頃のインディアンは概して友好的であったが、白人が多くなり植民地社会が膨張して生活領域を侵害したのが最大の要因となった。協定を結んだり交易したりして常に争っていたわけではないが、互いに不安定な関係を繰り返した。インディアンの生活も白人との接触で大きく変化し、金属器具や衣類を取り入れ、特に飲酒の習慣がなかったので、酒は砂糖と共に大きな健康被害をもたらした。それに白人の求める毛皮獣の捕獲が、環境のバランスを崩す結果を招くこととなる。

七年戦争で白人の二大勢力が争い、フランスが敗れて領土を失った時、同国と提携していた諸部族は大きな打撃を受けた。イギリスは国王宣言線を設定して植民地人の西部進出を抑制したので、革命戦争時は大半の部族がイギリス側に付いた。にも拘らずイギリスは彼らの居住地をアメリカに譲った。また1812年英米間で戦争があり、アメリカはインディアンを破り、その後フランスはナポレオン時代にルイジアナを売却、スペインもフロリダをアメリカに譲渡した。この頃南部では綿作ブームが起きていた。チェロキー族は白人の生活を導入し、綿栽培、牛の飼育、機械や製材所を用い、新聞や学校の開設も実施した。しかし1830年代にミシシッピ河の西へ移住せざるを得なかった。この悲劇については「『グラント将軍』とアメリカ文明の形成」第４節２項で扱った通りである。

1849年になるとカリフォルニアでゴールドラッシュが始まり、大平原は交通路となって鉄道が敷設され、連邦政府は諸部族を指定した土地に追い込む政策をとった。抵抗には仮借のない攻撃が加えられ、平原インディアンは指定の保留地への移住に同意せざるを得なかった。68年以降、彼らは従属民として扱われることになる。南北戦争後1870年代にもインディアン戦争は幾つか起こったが、1890年にスー族との間でサウスダコタで戦われたのが最後となった。70年代末、アメリカ市民の間にもインディアン政策の過去と現状への批判が出され、ヘレン・ジャクソンの

「恥ずべき一世紀」(1881) が人びとの人道的関心を高めたという。連邦は1887年になって、ドーズ法を制定してインディアンの独立と文明化を進める政策をとったが、市民権が与えられたのは1929年になってからである。彼らは保留地に移されても伝統的習俗の放棄を強いられ、人種差別の壁にも会い、その上インディアン局の役人には腐敗も多かった。1934年インディアン再組織法が成立、土地を部族所有に改め、部族単位の経済活動が認められた。今日、インディアンは平均所得が少数民族の中でも最も低いが、19世紀末24万の人口から1970年には79万に増加した。近来、先住民族は 'Native American' としての連帯意識を持つようになり、連邦も一方的な政策をとらずインディアン指導者の意向を聞き、インディアン局（内務次官補）にはインディアンが就任するようになっている。

（3）フロンティア世界の人物像

19世紀フロンティアの時代に英雄として伝説化された人物について、『アメリカ史概論』（有賀貞）に取り上げられたものの一部を、ここに簡単に紹介して参考にしたいと思う。

ケンタッキー、ミズリ州の開拓に従事し、土地の権利が得られず死亡したダニエル・ブーンは、伝記作家たちが既成社会の束縛と堕落から逃れ、自然に適応して新しい文明を創始した人物として作り上げた代表的存在であった。また第七代大統領アンドルー・ジャクソンは、堕落をもたらす成熟した文明社会と隔絶した自然に適応し、自然の中の貴人というイメージに後援者たちに依って仕立てられたという。丁度前論「二つのアメリカ論とアメリカ文明の展開」第１節３項で述べたように、アメリカ人は無教養で粗暴だと一般のヨーロッパ人は見なしていた。それと同じような見方を東部人は西部人に抱いていた。それに対抗して、自然と接触して生活する文明人こそ最も高貴な精神を持つと強調したのである。1840年の大統領選挙に出たウイリアム・H・ハリソンは、大邸宅に住みながら丸太小屋の質素な農夫に仕立てられ、リンカーンすら丸太小屋育ちの勤勉努力の人と伝説化されたとも言われる。40年代の人気あるフロンティア・マンにアラモ砦で戦死したクロケット、19世紀初に果樹を育て、インディアンと争わず、鳥獣を殺さず環境保護の先駆者ともなった人物にジョナサン・チャップマンが居た。

また1820－30年代には新宗教集団が多数存在し、宗教的動機により西部に移住した人たちもあった。ジョセフ・スミスのモルモン教団（末日聖徒イエス・キリスト教会）で、1830年ニューヨーク北部の農村地帯でモルモンの書を新・旧訳に加えて聖典とし、一夫多妻の教義のために殺害された。グリンガム・ヤングが教徒を率いてユタ州ソルトレイク湖畔に移住し、1890年代に一夫多妻を否認、現在では最も禁欲的で保守的、勤勉な人びととして知られる。その他にもユートピア的共同社会を目指した人たちがあったが、西部農民の自立的で質実剛健の気風を理想としたに拘らず、現実には不満は大きく、農民運動も廃せなかった。しかし定住のために女性が重要な役割りを果たし、その数の少なさもあって女性尊重の気風を高めたとも言われる。南北戦争後、牛の大群を追って大草原に生きたカウボーイたち、悪漢と対決した保安官のガン・ファイターも実在した。しかし馬を巧みに操る平原インディアンに対抗し、勝利を収めた騎兵隊には残

虐行為も知られていて、全滅したカスター将軍の他には英雄は生れなかった。却ってインディアンのシッティング・ブルやジェロニモの武勇が名を残すことになった。

（4）フロンティアの遺産

広大な大陸を急速に開発してアメリカ国家が発展し、その西方拡大の流動性の継続が階級の固定化や国民の不満を防ぐ要因になったとする学説も多い。これがアメリカ社会の性格と国民の気質の形成に大きく作用したと見る考え方である。これらの自由な土地は個人主義、経済的平等、上昇志向の自由、そして民主主義を促進した、という社会的安全弁説である。

フロンティアで培われたアメリカ人気質、「旺盛な活動力、実際的創意工夫、能力主義的平等主義、自主独立の精神、素朴な生活態度、楽天的気質などは、いずれもフロンティアの経験と結びつけられ、その遺産とみなされてきた」。[28]

農民は西部に行けばより広い土地を入手し、子供たちを東部の労働市場に流さず、徒らな階級意識を抱かせずにすんだということでもある。こうした考えを全面的に是認する事は出来ないにしても、決して否定すべきものではないであろう。所で短所は長所と裏腹なものであることから、次のようにも言える。性急過ぎる行動、能力主義から来る弱者への薄い同情、大きい経済的格差、暴力主義と単純な独善的態度、それに本論第１、２節で触れたプラグマチズムと裏腹の、実用的でない知識の軽視などである。これが社会の表面に自然の破壊、資源の浪費、生態系の破壊としても現れた。そうして今や、アメリカ人が他よりも多くの資源を利用して発展できた時代は終わり、歴史的にも転換の時期に入ったと言うべきであろう。

顧みれば1960年代後半、政治的暗殺・人種暴動・兇悪犯罪が続出し、暴力の伝統が論じられた。アメリカが急速に発展を遂げ、異民族人種や他宗教との接触ないし共存という現実があり、市民に武器所有が権利として認められている事に起因する。入植地の防衛、先住民との対立から実質的規制がなされなかった。それ以外に白人内部でも、フロンティア住民は政府の治安維持が充分でなく、犯罪者が出没し、これに自警団を組織して対抗したのである。また利害の対立がしばしば私的暴力に依って解決される場合もあった。フィリピン独立運動の制圧、ベトナム戦争、或いは太平洋戦争も異人種との戦争という点で、往おうにして残虐行為があったという共通性を指摘する声もある。西部はアメリカ人にとって生活の場とみなされたが、一方でアジアは彼らにとって商品や宗教、或いは政治理念の市場以上の存在ではなかったとも言える。今日のアフガニスタンやイラクでの戦争も、或点でこれに符合する流れを見出すことが可能かもしれない。

「19世紀アメリカは大きな対抗勢力に直面せず、領土を拡張し定住地を拡大できた。対抗勢力との妥協や共存を余儀なくされることなしに目的を達成できたために、アメリカは複雑な関係の現実を受け入れることを嫌い、一方的に行動し、対抗勢力を敵視する傾向がある」[29]、――これをフロンティア外交と呼ぶ説がある。これは言わば昨今のネオコン（Neo-Conservative）に通ずる論理で、その背景に力への信仰を見ることも出来るであろう。

4

以上第３節にはアメリカ・フロンティアの歴史とその発展について概略を述べてきた。本節第４では、当時主としてヨーロッパからとその他からの移民の流入を、従ってアメリカを構成する多民族の社会と、その成立について記述していくことにしたい。

（1）アングロ・アメリカ文化としての多民族社会

「われに与えよ、疲れたる者、貧しき者、自由を求めてひしめく群衆、岸辺にあふれるみじめなもくずを。われのもとに送れ、これら家もなく、風雨にさらされる人々を、われ光をかかげん。金色門のかたわらに。」(30)

これは1886年、アメリカで高まった外国移民制限の動きに抗して、除幕された自由の女神（the Statue of Liberty）に刻まれた制限反対の意志を表明した碑銘の訳文である。

アメリカは植民地建設以来移民の国であり、独立当時、既に様ざまな民族の住む国であった。特にイギリス植民地にはドイツ人・スイス人・フランス人（ユグノー、プロテスタント）、スペイン・ポルトガルからのユダヤ人が住み、宗教的理由による者が多かった。ニューヨークにはオランダ人、デラウェアにスエーデン人が移住し、また一口にイギリス人といっても、それにはイングランド、ウェールズ、スコットランド、アイルランド系とさまざまで、広義のイギリス系（アングロ・サクソン）は白人の人口の８割、その中イングランド系６割を占め、黒人奴隷が２割居たとされる。アングロ・サクソン以外で最大の集団はドイツ系で、ペンシルヴァニア・ダッチと呼ばれた。ニューヨークでは従来のオランダ系地主はイギリス系に同化し、上層階級を形成した。同一民族集団、同一宗教集団内での結婚が普通で、独立当初白人の８割を占めたアングロ・サクソン系が、イギリスから持ち込んだ法律や政治制度の下で生活し、これを新世界に適応発展させて新しいアメリカ文化を形成したのである。

「アメリカは多民族国家ではあるが、いくつかの民族が固有の言語、風俗習慣を守って何世紀も生活してきたという型の多民族国家ではない。イギリスの植民地として発達し、イギリス系、すなわちアングロ・サクソン系あるいはその文化に同化した人々の独立運動によって建てられた国である。後から到来した移民たちはアングロ・アメリカ文化を受けいれていくことを求められた。」(31)

広く移民を受け入れ、一定の在住年限の後に彼らを市民としていく方針をとった。黒人の場合は奴隷制度の下で強制的に彼らの文化が奪われ、奴隷の身分に拘束された。カトリックやユダヤ教徒は、プロテスタントへの改宗を要求されなかったが、英語を話し、アメリカの政治制度や経済制度を信奉し、アメリカ的倫理観を身につけるよう求められた。やがて異なる民族集団も、第２第３世代となってからは英語を話し、行動様式や価値観もアメリカ人的となった。

17世紀に移住したドイツ系アーミッシュ（Amish）はアングロ・サクソンに次ぐ民族集団であるが、上昇志向を持てばアングロ・サクソン文化に同化し、英語を使う必要に迫られた。そし

て勤勉を通じて成功を目指すようになる。今日フィラデルフィア郊外に、アーミッシ・カントリーとして、その生態を見る事ができる。またドイツ系に限らずフランス系（ニューオーリンズの祭り、マルディグラなど）、スペイン系など、外国から持ち込まれた宗教行事、祝祭、料理・食物や言語など、多彩な民族性文化（sub-culture）を残すこととなった。これらの少数民族集団の生活体験は、やがてアメリカの文学に豊富な題材を提供することにもなったのである。

（2）西欧・北欧系移民の流入

19世紀に西部の発展が加速され、ヨーロッパからの移民は増大した。移民流入と西部の発展とは相互に関連していたからである。広い未開拓の肥沃な土地と資源、自由の国として知られていた事による。帰化条件は寛大で、居住期間は２年であった。その後14年という一時期を除いて４年となる。その頃 Nativism（本来のアメリカ人主義）が旧来の白人層 WASP によって唱えられ、新移民の持ち込む宗教・思想・風習への排斥運動も行われた。移民が10年間で100万人を超えたのは1840年代からで、アイルランドに大飢饉が襲い、イギリスが充分な救済策を講じなかった事、ドイツ南西部では農民層が分解し、イギリスや他地方の工業製品に圧迫された事などが原因である。移民の到着港はニューヨーク、他にボストン、フィラデルフィア、ボルティモア、ニューオーリンズで、移民の２割は到着地に住み、アイルランド系が貧しかったことに比し、ドイツ系は若干の資金や技能を持った者が多かった。南北戦争後ドイツ人は中西部に、アイルランド人は北東部に住んだ。スカンジナビア移民、イギリス移民もかなり存在した。カナダからもイギリス系、フランス系がアメリカ経済の発展に引かれて移住してきた。1860－89年の移民はドイツから300万、イギリス190万、アイルランド150万、スカンジナビア100万、総計約1,000万人、1890年アメリカ総人口6,300万中の１／３が外国出生の人であった。

移民の流入

年　代	移民数
1820－29	128,502
1830－39	538,831
1840－49	1,427,339
1850－59	2,814,554
1860－69	2,081,261
1870－79	2,742,137
1880－89	5,248,568
1890－99	3,694,294
1900－09	8,202,388
1910－19	6,347,380
1920－29	4,295,510
1930－39	699,375
1940－49	856,608
1950－59	2,499,268
1960－69	3,213,749
1970－79	4,232,325

出所　*Historical Statistics of the United States* (1975); *The* 1986 *Information Please Almanac* (1986), に基づいて算出.
（「アメリカ史概論」有賀貞，東大出版より転写）

移民を受け入れ、その能力を活用するのがアメリカの政策であったが、宗教や民族を異にする移民が増大すれば反感が生じるのは不可避であった。カトリック教徒への非難、新移民への禁酒運動も起きたが、やがて南北対立の風潮に呑み込まれてしまった。南北戦争中移民は大部分が北部に住み、ドイツ移民には自由主義者が多いが、アイルランド系は都市の下層民で自由黒人と競合する立場にあった。従って彼らは黒人のために戦う事を喜ばず、しばしば反徴兵暴動を起こしたのである。しかし1840－60年代にアメリカに来た移民の成功者には、スコットランドからの鉄鋼王アンドルー・カーネギー、共和党有力政治家のドイツ系カール・シャーツ、ハンガリーか

五番街でニューヨークを代表するアイリッシ・チャーチ、セント・パトリック。後背にトランプ・タワーとティファニー、手前はデパート、サックス・フィフスアベニュー（二〇〇六年七月）

らの新聞界の大立者ジョセフ・ピューリッツアー、金融・鉱山業で名を成したスイス系ユダヤ人メイヤー・グッゲンハイムらが居た。貧しかったアイルランド人は北東部の都市に集中し、政治的影響力を強めて経済的社会的地位を高めようとした。ニューヨーク、ボストンなど大都市の民主党の組織を支配し、ケネディ家は曾祖父が19世紀半ばにボストンに移住してきた貧しい職人で、後３代で大統領にもなった家系である。

公立学校は移民の子供たちをアメリカ化する機関となっていた。カトリック教徒のためには、教区学校といくつかの高等教育機関も作られた。ドイツ移民には知識人・教育者が多く、プロイセンの学校教育の評価が高かったことから、教育貢献度は大きかった。今日でも幼稚園にはキンダーガーテン（Kindergarten）というドイツ語が使われている。ドイツ系が非アングロ・サクソン系で高い威信を有する一方で、ユダヤ系は19世紀末までは少なかったが、商人や銀行家として財をなした者もある。19世紀の半ばには大陸横断鉄道の建設が進められ、多数の中国人労働者がこれに従事した。その後もカリフォルニアに定住し、競争する立場にあったアイルランド系労働者たちに強い反感を買っていた。1904年には、中国人の移民禁止が求められたのである。

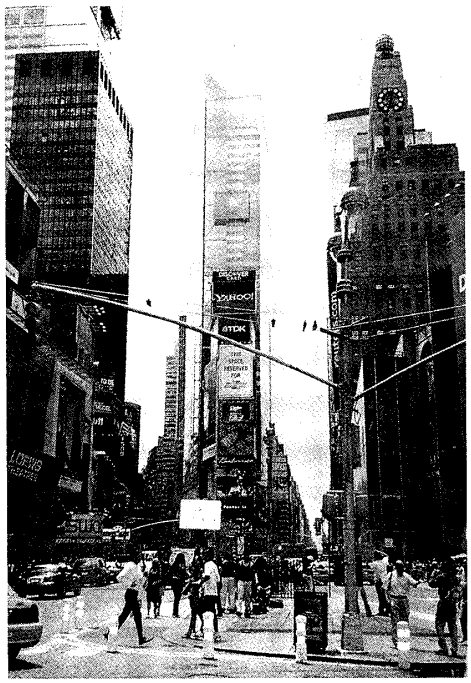
（３）東・南欧移民の増大

1880年頃までの移民は西・北欧からの主にチュートン民族で、プロテスタントの旧移民であった。19世紀末から20世紀初めには東・南欧移民が急増した。これら新移民はスラブ民族、ラテン民族、ユダヤ民族で、カトリック教徒が多く、ギリシャ正教徒、ユダヤ教徒であった。特に多いのがイタリア人、ユダヤ人、ポーランド人である。旧移民の減少は、先進国経済の発展により雇用・生活が向上したからである。新移民はヨーロッパの後進地域出で、1900－14の15年間に300万人のイタリア人が入国、彼らには資金・技能もなく、英語も話せなかったので、あらかた不熟

練労働者や農業労働者となった。東欧からのユダヤ移民はニューヨークに最も多く住んだが、識字率が高く、教育熱心で知的関心も強く、上昇志向が旺盛であった。三代までに経済的に成功し、知的職業に進んだ者も多い。スラブ系移民で最大派はポーランド系で、21％がニューヨークに住んだ。他にチェコ人、スロヴァキア人、南スラブ民族など、これら新移民は都市のスラム地区に民族ごと集って住んだ。新移民がアメリカ社会に定着する便宜を計ったのは政治ボス組織「マシーン」で、就職や生活の面倒をみ、市民権を取る援助をした。その上で彼らの投票を操作して権力の基盤としたのである。ボスは最初アイルランド系だったが、後にはイタリア系、ユダヤ系の者も出てきた。19世紀末にアイルランド系は中流に上昇する者が多くなり、アングロ・サクソン系は新移民、特に最も数多い集団のイタリア移民を蔑視した。彼らは貧しく文盲であるだけでなく、本国の犯罪組織マフィアが入り込んできたからである。東欧からのユダヤ移民も差別と偏見の対象となった。それはギルデッド・エイジ（メッキ時代）に、ユダヤ系が商人や銀行家として成功した者が多かったためである。カトリック教徒やギリシャ正教徒もプロテスタント・アメリカ人からは違和感をもって見られていたが、彼らが社会的に上昇し始めると、幾つかの差別を経験した。またアメリカでは社交クラブが発達していて、会員資格についてWASP中心の名門クラブでは、近年までユダヤ系だけでなくプロテスタント以外の人たちを締め出していたという。20世紀に至って以降プロテスタント、カトリック、ユダヤ教などそれぞれに、自身の教会の下で宗教生活を営んでいる。

（4）欧州移民、アジア移民の制限と禁止

19世紀末にフロンティアが消滅し、経済不況も重なって、移民制限論が高まった。文化的差異の大きい移民を吸収同化可能か、民族的資質が劣らないか、無知な移民がアメリカ民主主義の伝統を損ねないか、という疑問が提示された。20世紀初に移民集団を支配していた政治ボスを打破し、移民制限が改革の一つと考えられるようになる。19世紀末まで中国人の他に移民制限はなく、82年の移民法で伝染病患者と障害者を禁じたのが唯一の規制であった。移民の８割はニューヨークに来たので、港外のエリス島に検査施設が作られた。1914年第一次大戦が始まりアメリカが参戦すると、愛国心で世論統一が計られ、反戦論者の迫害、ドイツ系サブカルチャーの追放気運が猛威を振るった。ロシアに革命が起きると、ヨーロッパ移民の危険思想を警戒し、革命分子の移住を禁止した。1920年、２人のイタリア移民無政府主義者が冤罪で死刑判決を受け、抗議が広がった（サッコ・バンゼッティ運動）。移民排斥と外来危険思想排除の団体が台頭し、20年代前半に秘密結社クー・クラックスクラン（Ｋ・Ｋ・Ｋ団）が南部だけでなく北部にも支持者を拡大。1921年暫定的移民制限法を制定し、東・南欧移民の制限、アジア移民禁止を継続した。アジア移民への差別は、１．アメリカ市民権の不承認、２．州法により私的土地所有の制限、３．アジア移民の全面禁止の実現、４．アイルランド系・イタリア系が排日急先鋒となる、などであった。20世紀に入り日系移民がカリフォルニアに増加したため、1907－８年にセオドア・ルーズベルト大統領時、日米紳士協定により自主規制、ハワイ日系人の本土移住の禁止、日本人脅威



世界の人種と民族で賑わうニューヨークの中心、タイムズ・スクエアーで、南面して（二〇〇六年七月）

論・異質論が唱えられた。1924年移民法ではイギリスを最大に北・西欧で80％を占め、東南欧移民を制限した。但し19世紀末にカナダから、20世紀に入りメキシコから移民が増加、後者には安い労働力が求められ、上昇志向も強くなかったからだという。

（5）異民族集団との共生社会へ

移民制限法と大不況のため1930年代、移民は大幅に減少した。そのためアメリカ社会は民族集団をアメリカ人として吸収し易くなり、各集団のサブカルチャーも個性を弱めて混合が次第に進んだ。第２次大戦時にドイツ系アメリカ人はナチズムに同感する者が少なく、イタリア系もムッソリーニを弁護する市民は殆ど居なかった。しかしハワイ奇襲攻撃で始まった太平洋戦争では、従来の偏見の上に反感と不信が高まり、1942年２月、大統領行政命令によりハワイを除く日系人11万人を山間部の収容所に移した。43年初、陸軍は二世青年に軍務に付く資格を与えたのでハワイと本土を合わせ、33,000人の日系人が軍人・軍属として従軍した。この第442連隊はイタリア戦線で大損害にめげず勇名を馳せ、戦後完全な市民として扱われることとなった。上院議員ダニエル・イノウエはこの戦場で片腕となった勇士である。1959年ハワイは米国の一州となった。戦争中には挙国一致体制がとられ、新白人移民集団もアメリカ化し、宗教の違いを超えてアメリカ的信条を共有することで認められるようになる。ただしメキシコ人は戦中から64年まで労働力不足のため移入されていた。1953年マッカラン・ウォルター法が西欧優先としながらも、アジア人に最少枠の移民を認めた。しかしこれはマッカーシィズムの下で共産主義に厳しい対応をするものであった。冷戦構造の中でアジア系、アフリカ系に差別撤廃の有利な状況が形成され、「人種差別の存在は民主主義の指導国としてのアメリカが対外政策を遂行する上で、大きな負担となってきた」[32] のである。1965年の移民法は少数民族の市民権を守り、国別割当も廃止した。

ベトナム戦争後ベトナム人、韓国人も多数定住するようになり、今ではアジア人以外にメキシコ人、中南米人の合法・非合法の移民集団も多く存在する。21世紀に入って程なくカリフォルニア州で白人人口が50％を割った事が確認されたが、９.11事件後イスラム教徒への眼は厳しくなったと言う。また、ごく最近の読売新聞によると、ヒスパニック／ラティーノは2006年推計全米人口２億9,939万人のうち、14.8％にあたる4,425万人に達して、2001年以来黒人を上まわり、これが大統領選挙をはじめ「爆発的増加を続けるマイノリティーが、ついに米国政治を揺り動かそうとしている」[33]と報じている。米国に滞在する不法移民は推定約1,200万人、その８割近くが、「豊かさ」を求めてやってきた中南米出身の貧しい人々だという。合法化か締め出しか、共和党も民主党も有効な打開策を見出せないまま、多様性を誇ってきたこの移民社会は苦悩にあえいでいる、という状況である。疑いもなく、自由と平等の大原則の下、アメリカ社会が異った民族集団との共生の道を模索して行かねばならぬ運命にあることは、疑いない事実であろう。

※　※

単に旅行するだけでなく実際にアメリカ、特にニューヨークに長短３度も住んでみて、体験する現象、接触した人たちのことについて、その背景と本性とを自分で学び、考えてみると、少しでもより深くアメリカを理解できたような気になる。前半節１、２でのエマーソン論と後半３、４節のフロンティア、移民問題とでは接点が思うように見出せなかったが、それはまた後続する論で繋げて行くことにしたい。続くアーノルドの“Literature and Science”、および“Numbers”論で20世紀末または現在までのアメリカを文明史的に扱った後は、資本の帝国主義観や地球環境問題、それに中国・インドの抬頭、EU の統合・拡大と中東オイルマネーなどの現実情勢を踏まえた上で、「文明の衝突」論で名高いハンチントン教授、キッシンジャー、ブレジンスキー、ナイ教授ら優れた国際政治学者、アルビン・トフラーなど未来学の専門家の言葉を参考に、この自由と平等に始ったアメリカ文明の行く先と世界の未来像に就いて、私なりに解釈してみるのを本論シリーズの最終目標と考えている。

〔註〕

（１）“*Philistinism in England and America*”, The Complete Prose Works of Matthew Arnold X; Edited by R. H. Super, Ann Arbor, the Univ. of Michigan Press. p.239, *l*.1.
（２）Ibid., p.240, *l*.30.
（３）*Cf.* Ibid., Critical and Explanatory Notes. p.534.
（４）*Cf.*『マシュー・アーノルドと諸人の救い』，渡辺栄太郎，文化書房博文社・倉敷印刷。p.88～89.
（５）“*Philistinism in England and America*”, Critical and Explanatory Notes. p.504.
（６）Ibid., p.165, *l*.1.
（７）Ibid., p.167, *l*.11.
（８）Ibid., p.167, *l*.33, and p.168, *l*.1.
（９）Ibid., p.169, *l*.23.
（10）エマーソンの住居のあった場所コンコードに建立された記念碑。
（11）“*Philistinism in England and America*”, p.170, *l*.14.

(12) Ibid., p.170, *l*.26.
(13) Ibid., p.174, *l*.9.
(14) 『英米文学辞典』第三版，研究社。p.386，左段 *l*.32.
(15) "*Philistinism in England and America*", p.176, *l*.1.
(16) Ibid., p.177, *l*.28.
(17) 『自省録』，マルクス・アウレリウス，岩波文庫，神谷美恵子訳。p.27, p.110.
(18) "*Philistinism in England and America*", p.181, *l*.34.
(19) Ibid., p.184, *l*.25.
(20) Ibid., p.185, *l*.14.
(21) Ibid., p.186, *l*.10.
(22) *Cf*. Ibid., Critical and Explanatory Notes. p.515.
(23) 『哲学・思想事典』，広松渉，他。岩波書店。p.1084，左段。
(24) 『現代のアメリカ・事典』，青山南，他。大修館書店。p.347，右段。
(25) "*Matthew Arnold and American Culture*", John H. Raleigh, Univ. of California Press. 1961, p.72, *l*.18.
(26) 『新版・アメリカ合衆国史』，C．ビアード，他。松本・岸村・本間訳；岩波書店。p.296, *l*.8.
(27) 『アメリカ史概論』，有賀貞，東大出版。p.186, *l*.4.
(28) 同著者同書，p.195, *l*.7.
(29) 同著者同書，p.198, *l*.3.
(30) 『新版・アメリカ合衆国史』，C．ビアード，他；岩波書店。p.413, 上段 *l*.18.
(31) 『アメリカ史概論』，有賀貞。p.201, *l*.9.
(32) 同著者同書，p.225, *l*.13.
(33) 読売新聞 '07年９月18日㈫の記事。統計数字は、米国勢調査局2006年推計による。

(Aug. 25, 2007.)